

歴史に於ける辨證的と産出的

由 良 哲 次

辨證といふ概念が、古來これを用ひた殆んどすべての哲學者に於てその意味内容を異にしたのみならず、これを主要概念としてその體系に用ひた哲學者に於てすら、必ずしも一義的に規定されたるものとし、若しくは歴史把握の基本様式を辨證法に求めんとすることには、或種の『限界』の認めらるゝことではないであらうか。また、辨證といふことと或る意味にては對立的なる意味をもつものとせらるゝ連續の概念が、歴史的存在に於ける一般的特質を示す個性に關して別種の意味をもち來るとき、個性的連續に於て見らるゝ産出の概念が却つて歴史の本質を示すにより適はしきものとは考へ得ないであらうか。あらゆる歴史なるものをもつ『個性』の意味を闡明にし、これを契機とすることによつて、歴史に於ける『辨證』と『連續』とは一の『産出』概念に契合を見出すのみならず、この概念は、歴史の本質を示し、その把握に不可缺の概念となり得ると考へ得ないであらうか。

二

吾等の如實に生ける意識の事實が一の連續性をもてるものなることは疑ひ得ない。刻々に新たなものを持ちつゝも必ず舊なるものとの聯絡に於て成立し、瞬間毎に飛躍的なるものを持ちつゝも、それは必ず基礎たるものに孕まれたるものであり、生み出されたる異別のものも類をもつ中に同化せられ常に一の經驗の全體を形作つてゆく。他人の意識は吾等に一の異他なるものとして示されるであらう。ことには意識より異種のもの認めらるゝ自然的存在は、かゝる我のうちらなる統一にある連續とはなり得ないとも言へるであらう。しかし意識的經驗に於て接觸をもち、相關を保つといふことは既に一の通約可能性の存することを示すものであり、單なる非連續以上のものをもつと言はねばならぬ。個性と個性との相關と、個性と時代が作りゆく境位の推移によつて成り立つ歴史は、この意味にて一の廣く且つ深き連續によつて可能である。歴史とは時の經過に於てあるものと、その認識・記述でありとすれば、その何れも連續なくしては不可能である。歴史は無限の個性を含んでこれを聯關せしめ、従つて又個性による個性の認識の可能の豫想の上に成立してゐると言ひ得るであらう。個性相互がもつ不連續とは、歴史のうちなるものとしては絶對的非連續を意味するのではない。それはある條件だに充たさるれば連續しうべきものにして、只その中間項の缺陷、もしくは發展すべき時の未熟による不充足を意味するのみである。生と意識が連續によつて初めて

成立する様に、人間的個性は歴史に於て一の連續の中にあつて初めてその存立をもつ。

しかしこゝに言ふコンテイヌイテ連續ステエチカイテといふことは、固より單なる同一なるもの持ステエチカイテ續ではない。連續

の状態はこれを徹にしても徹分的異質を含むものである。意識の連續が一の流れをなすといふのも刻々に異なるものゝ流動的繼續を意味するものに外ならない。これを吾等の連續的なる意識的經驗について見ても、その中に、個々に異質なるものゝ差違的對立が含まれてゐる。また意識の作用自らも、意識の基底に存するものとの異別、自己の意識と他人の意識との異別、境位を作る個々の要素と意識との異別、凡そこれ等の異別なるものを、連續はその中に含んでゐるのである。連續といふ概念はその種々なる用例に見ても事實決して一義的に使用されてゐない。しかし移動と作用に於ける一なるもの、異質と變化に於ける一なるものを認むることに於てこれの根本的なる意味は存すると思はれる。ライブニツツはその徹分的連續を量的世界觀と結合したが、連續の眞義は寧ろその他面に於て認められてゐた質的向上、目的論的發展觀に即して有意義的であり、彼の單子論が歴史的世界上に適用されうる可能性は寧ろ主としてこの後者の特色に依存する。連續性をかく特に精神的なるものゝ特質として見るとき、それは單に一なるもの、おのづからなる開展ではなく、單に固定的なる持續の同一ではなく、發展に於ける同一、不斷絶の作用として見らるべく、連續は終極に作用的なるものに於ける自己同一の保持、空虚を許さぬ基底性の根本定立であるといふことが出来る。

三

歴史的領域の考察に於て一の基本概念として妥當すると思はるゝ『主體』の概念は、古來歴史學派が單に抽象的なる概念の思索を排して現存する人間個體の價値を認めたる傾向を追ひ、近時の人間學的思想と實存の哲學を通して達せられたるものとして、吾等が歴史の基礎的考察をなすに重要な言ふ迄もない。しかしそれが人間個人に即する概念たる以上、從來の觀念論の主觀性は脱しうるとしても未だ決してその相對性を脱することは出来ない。それは尙ほ全たく異種の對立者としての客體的自然との關係を基礎的に説明し、同様なる多數の主體との根本的なる相關と契合を説明しうるためには、やはりその基底に潜むより一般的なるものを概念的にとり出して『基體』の概念を認むるの外ないであらう。それは恰も、自然研究に於ける『個』に對して概念的整理の方法概念としての『種』概念にあたるものであらう。しかし自然存在に於けるこの概念的圖式に於ても、『種』が尙ほ種差を通してなす相互の對立的關係と聯繫を可能ならしむるものとして『類』概念が必須である。類こそは多くの種を種たらしむるものである。恰もこれに似て、歴史の領域に於ても吾等は『基體』概念をもつてその總てを盡すことは出来ない。勿論歴史を只經驗的に現はるゝ團體、民族、國家の經過する現象と限れば、歴史に於ては『基體』を終極の基礎概念と見做し得るは當然であるが、吾等の歴史生活に於ては基體的制約以上のもののあることも疑ひ得ない。事實過去の多くの思想や藝術に

於て世界といふ理念、精神といふ概念、人道といふ如き觀念の存したことは否定さるべくもない。固よりこれらの思想も業績もリアリテルにこれを言へば、オウガスチンの「神の國」も中世的羅馬の時代的制約を受け、カントの普遍妥當性を意圖した體系もプロシヤ民族の規定を免れてはゐない。現實の歴史的成果としては種的规定のもとにある。しかしこれをイデアリテルに見れば基體的種相以上の特質をもつことを無視するを得ない。否却つて類的基礎の上に種の基體的特實も明かになるので、これは單に個よりの歸納によつても、果たまた種相互の比較によつても明かになし得ないのであらう。しかしてかゝる類的特質も單に一の假想的なるものではなく、一の基本的な規定作用をもつものであるならば、吾等は『基體』そのものゝ形成規定の根柢に、言はゞ『理體』なるもの措置して考へねばならぬ。これは一切の普遍とあらゆる相對以上の規定力の基礎として、そしてすべての永遠性のこれに歸入せらるゝ至高のロゴスの性格をもつものである。

自然の領域にては個、種、類なる概念は、分類の手段として用ひらるゝ方法概念であるに對し、歴史の領域にあつては主體、基體、理體の概念はたゞに概念的把握の方法的意味をもつ以上に、何等か事實に於て作用せる根本作用たるものなる意味にてそれはリアリテイトに實存する、まことの意味にての概念であり眞實である。單に現にあるリアリテイトとしてのみならず、常に尙ほ現にあらざるものを持ち、しかもこれを根源より發源する基底的なる力として實現するイデアリテイトの

意味を併せ有してゐる。しかし歴史の領域に於て主體、基體、理體が共に作用する基礎概念であるといふことは、吾等に尙ほ、この三者に一貫して存するあるものを思はしめないであらうか。私はそれを『實體』に求めたい。それは類のゲノスの性格を現はすものとして、理體の根源に潜んで種差を産むものであり、主體の中に自らを形成して個體を實現すると同時に、主體をして個性的なるものとし、無限の個性の相關を可能ならしめるものである。基體と主體に自らを實現して、しかも自らを失はず、常に個性化に於て自らを現はすリアリテイトと、個性の相關によつて普通の基底との相即を可能ならしむるイデアリテイトをとともに具するものである。作用の根源として、現象の基底として、凡ゆる歴史的なるもの、眞實體である。歴史的實體は最も現實的には、現存する個性的人格のあらゆる實現と生成の基本たるものであると同時に、その民族の血統に流れて自らを支持し、民族と國家に於て永續する特性の創成に自らを生きつゝ、世界精神の中に自らの根源をもつものである。そしてそれは絶對の唯一者として無限の個性の相關に於て自ら存し、宇宙に於て一つの永遠の座をもつものである。個、種、類を單に方法概念としてもつ自然の領域に於ても、これを全體として有意味なる進展の中に見うるとき、この三つを貫いて目的論的なる概念の考へられうる様に、この歴史的實體の概念は言はゞ主體、基體、理體の三基礎概念を通して存する眞にして實なるものとして、唯一の根本概念であるとも言へよう。私はかくして、歴史學とは多様に實現したる個性的

實體の學であり、歴史哲學とは歴史的實體の法則の學であると考へてゐる。

歴史哲學的考察に於て缺くべからざる究極の概念として私の提示せんとする『歴史的實體』そのものの精叙に關しては、私の他の論考に省みらるゝの外ないが、そは一言にして言へば、歴史的なるあらゆる存在に關してその實在的基礎たるとともにその權利根據となる基底であり、實存と眞理の統一、知的主觀と實踐的主體との根幹、普遍的なる永久的精神と個別的な生存をもつ身體との歸一する根柢であり、その現實的能作に於ては『基礎』と『主體』を通して最も著しく個性化の原理と個性の自己支持性の働きとして現はるゝのみならず、あらゆる個性に對してそれのもつ實體性の故に『理體』の理念を通して大いなる聯關と統一とを働く。そしてかゝる實體のあらゆる能作に於て基礎的なる作用は即ち連続性である。生と歴史に於ける連続は究極には實體の連続の能作による。しかしてその連続は單なる持續ではなく、無限の個性化を通しての連続である。かくの如き連続はより適はしく産出的もしくは生産的特質をもつといふことを得るであらう。

歴史的實體はかくて一面に於て個性化的なるものであると同時に、他面に於て連續的なることを、その根本特質とする。實體が主體、基礎、理體を貫いて存する根本概念として妥當しうべしといふのも、それがこの三者を連続せしめつゝ、しかも個性化する根本作用をもつ故と考へられる。かくして實體は個性化の原理を含む理體、類のゲノスの性格として、一面に個性化の能作をもちつゝあ

らゆる個性を連續せしめる。しかしてこのことは又實體概念が、叡知的性格と考へらるゝものと、意識的現實とを如實に連續せしむる所以であるとともに、獨自にして異別なる現實の個性の相關を可能ならしめ、相互の理解を可能ならしめる。歴史的認識といふこともかゝる實體の基礎的能力を考ふることなくしては究極に不可能のことであると言はねばならぬ。しかして先きに連續とは終極に作用的なるものに於ける自己同一の保持、空虚を許さぬ基底性の根本定立であるといつたが、かゝる根本定立は、歴史的領域に於ては實體がこれにあたると考へられる。かゝる實體こそ歴史に於けるあらゆる連續を作るとともに、又現實の意識の連續をも作るものである。終極に自己同一なるものなくして、作用といふことも不可能である。ことに連續の原理として實體が吾等に齎らす特質は實體と現實との連續である。この故に實體は單に超越的のものではなく、現象が單に假象のものたらざるを得るのである。吾等の祖先がもつた上代の現實肯定の思想や、わが中世以降の因縁思想は、現實と絶對を、もしくは現世と來世を決して超絶と對立に於て考へたのではない。それは自然即眞實であり、因果を單に現象の知性的連結となすのではなくして實體と勤行とが常に深き因果に於て考へられてゐた。

四

しかし實體は單なる持續の連續性をもつものではない。個性化的なる連續として、それは内實に於

て異質の多様をその對立に於てもつてゐる。歴史は個性的實體の多様に於て成り立つが、その個性的なるものは決して、相互に同一的なるものとして單なる一體に於て自らを示すものではない。然らば歴史に於ける個性は相容れ難き矛盾にあるものとして、言はず辨證的世界を作るのであらうか。辨證と連續とは、歴史の領域に於て根本的に如何なる關係をなすと考ふべきであらうか。

凡そ辨證といふ概念程、哲學の歴史に於て多義なる内容と特色を示したものは少いであらう。ヘラクライトス以降、殆んどすべての哲人にしてこの語を用ひざるはなく、しかして各々の哲人によつて異なる内容と色彩を盛られざるはなかつた。吾等はこれをプラトンのそれとプロチンに於けるそれと、ヘーゲルに於けるそれとシュライエルマツヘルに於けるそれとを想起すれば足りる。そして辨證といふ概念自らがそれ自身に辨證を要し、また辨證を遂げ來り、辨證の概念内容そのものが辨證の眞たることを自證し來つたともいふことが出来る。辨證といふ言葉が、決して具體的彫塑的な思惟法をはなるとなかつた希臘に於て起つた特質として、それは自ら實在するもの自らの連なる必然的過程の特色と考へられたであらう。しかし後にこの語を單なる哲學の概念的 Usage に圖式化するに至つて、それは單に思惟の形式的圖式となり終つた。そして存在するものとその歷程の内面的必然を把握する代りに、單に辨證を既定の圖型としてこれをもつて實在の型式に外的に當はめようとするにすぎらある。一體にこの辨證をもつて哲學的考察の態度とするに當つても、これに凡そ三

様を見分けることが出来ると思ふ。その一つは言はゞ解釋的辨證であつて現實を矛盾を含む既成のものとし、そのあるが儘に受容承認し、しかもその矛盾をば二律背反的な對立と統一として説き、一皆の現實をこの相に於て解義するものである。それは現實を靜觀する立場であり、我を現實より離れたるものとして對せしめてゐる。第二のものは我をその現實の中に入れ、しかして現實を矛盾による對立とし、我をもその要素として力闘的な反省と否定に於て矛盾の現實の過程と意義とを自覺するもの、これは自覺的辨證といふことをうるであらう。ここには先きの觀照にてではなく行動の具體的な動性に於て考へられてはゐるが、しかし尙ほ現實を内面的に二律背反的な對峙の相克として捉へられてゐる。第三はこの行動を敵峙的な二元的反立の相克とすることなく、多様の個性のそれ／＼の自立に於て維持せらるゝ相關とし、この現實を作りなす根本的なる行動の根源より言はゞ行的に直觀せるものである。それは現實と縁なき他者よりの觀照ではなく、對者を絶滅せんとする相克の辨證でもなく、個性を個性のまゝに、その存立と相關とを一の根本的なる基礎より言はゞ生産の行を通して直觀する究極の見方である。しかしてこの三様の辨證が認められうべしとするとき、第二のものは第一のものに比して内面的であり、第三のものは第二のものに比してより具體的であり、辨證の語義の生じた希臘的原義に深められたる親近さをもつものはこの第三の直觀的辨證であらう。

辨證といふ概念が哲學の歴史に於て、及び現今の思想に於てもつ多様の諸相とその特質にかゝはらず、吾等はしかし、これに最も特質的なるものとして、實在そのものもつ矛盾、矛盾する相互の對立者の否定、否定が何等かの成果に至り得んための媒介なるものを見出す。凡そ多義を示す中の辨證は、何等かの形にて、この矛盾、否定、媒介の三様相を示さざるはない。

如何なる辨證も何等かの究極の實在的なるものを許さざるはない。しかしてこの實在の究極性より變動性と多様性を導き得んために、實在そのもの、矛盾を認めるのであるが、實在より矛盾によつてその動と多を示し來る所に、抑々辨證的なる考へ方の根本がある。そしてこの實在的なるものは多くロゴスの永遠性として示され、矛盾はこれに反する非合理的なるものとして示される。この矛盾が如何なるものとして教へられてゐるかは、矛盾に伴ふ實在の能作としての否定によつて明かにせられる。併し乍ら辨證に於ける否定とは抑々何を意味するのであらうか。矛盾といふことが否定といふことを導き來るのであるがこの否定にも吾等は又種々なる意味を見出すのである。先づ絶對的矛盾従つて絶對的否定と、相對的矛盾従つて相對的否定とを考へることが出来る。辨證に於ても全たき意味にての絶對的矛盾といふことはそれ自らの實在をなくするか、もしありとしても、それは毫も他と關係するといふ可能すらもたないものであるといはねばならぬ。辨證に於ける矛盾とは實在がもつ性質の一つに對してあり、存在を否定して生成が導かれるといふことも、存在の靜

止的性質の否定によつて、^ハあつて、生成そのものが無となるのではない。相對的矛盾より來る否定には、自己矛盾より來るものと既定の對立者相互の否定とがある。自己矛盾は單に論理的なるものにてはその命題や主張が消滅し終るのであるが、人間に於て見出さるゝものはその否定が即ち反省といふ意味を帯びる。反省とは根源に於ける歸一の要求であり、一の新なる基礎にまで解明せられるのであつて、決して自己自らの存在を否定するのではない。人は自己否定によつて刻々に革新して行くのであるが、それを貫いて純化せられ、發展せらるゝ自我そのものは止まり存してゐる。次に對立者相互の矛盾と否定に於ても、否定は決して對者の絶滅を意圖するものではない。辨證の眞義は自己とともに對者を救ふにある。リッケルトは辨證の意義を定立の消極的否定に於ては、^ハはなく、積極的補^{テグレンツグ}足^{註一}に於て認めてゐる様である。併しこれも辨證の一方的意義を認めてゐるものと言はねばならぬ。更に對者の辨證の一つに、我と、優位せる汝即ち神との辨證が見出される。ゴীগアルテンの如き辨證的神學者は神の創造としての隣人、汝を我に對立せしめ、汝に傳統や宗教の權威を帯びしめて我に優位的對立をもつものと考へ、神と我との二元的對立關係より宗教的經驗を説き、神と傳統を代表する汝の發見と遭遇によつて歴史を導かうとし、歴史を神に基づかしめ、歴史を神學思想化しようとした。しかしこの對立は相互的對立といふよりも寧ろ對者への自己没入の態度である。一般に辨證神學的思想は、舊教の超越的神觀に基づくキルクゴールの絶對矛盾の辨證觀に

基づいてゐる。矛盾といふものを最もラディカルに考へつめ、そしてそれによつて自己の内生の鋭き矛盾に苦惱したこと、キルケゴールに及ぶものはないであらう。彼にては矛盾は文字通りに第三者を容るゝものではなかつた。そして二者は必ずその一者のみが擇ばるべく、他者は絶対に廢棄されねばならなかつた。この二者擇一の思想は人生觀におし及ぼされては彼の所謂「段階」の思想となり、感性的生活は秋毫も倫理的生活と相容るゝものではなく、倫理的生活は宗教的生活と相容れざる矛盾に於てある。道徳に達せんとするものは感性を捨離し、神に達せんとするものは人倫を諦斷しなければならぬ。人間的なる一皆を超絶する瞬間にこそ神の永遠は宿るのである。彼がヘーゲルの辨證法に反對したのも、その單に概念的な推理を排したによるばかりでなく、ヘーゲルの辨證の止揚が先きの二者を尙ほ存置する苟合の不徹底を排したによるのである。ヘーゲルの辨證が止揚の辨證であると言へば、キルケゴールのそれは諦斷の辨證である。しかし一皆の人倫生活を絶滅して宗教「生活」も不可能であることは明かであつて、キルケゴールの思想にも一面尙ほ宗教生活に人倫生活との調和の思想も存し、諦斷の一瞬を説く反面には時の熟するといふ要件も認められ、一皆非妥協の矛盾を説く主張にも尙ほ全體に「愛」の調和の業わざを説く思想も認められる。註二

註一 Rieker: Thesen zum System der Philosophie. Logos B. XXI.

註二 拙稿キルケゴールに於ける瞬間と永遠、思想、昭和十一年二月。

五

吾等はここに辨證の含む多義性の詮索とその論理的考察を精細に遂行すべきではなく、辨證がもつ矛盾と否定の、歴史に對して持つべき意義に主題を進めようと思ふ。

辨證の論理は單に論理として完全に徹底さるべき眞理と方途とをもつであらう。しかし歴史に適用さるべき、もしくは歴史に於ける辨證はこれとは特質を異にするもののあるを認めざるを得ない。歴史に於て眞理をもつべき辨證は絶對矛盾の辨證ではありえない。歴史に於ける否定は絶對否定たるよりも相對的否定、もしくは無限否定でなければならぬ。しかしこのことは單なる論理的否定ではなくして、具體的なる限定であることを意味する。即ちその否定は却つて個性的なる生の構成と陶冶を可能ならしむる基礎的能作である。絶對否定といふことは純粹論理のこととして、または形而上學的に實在するものゝ一性質としては考へうべきであらう。しかし歴史に關する限り、絶對否定がもつ根本的意義は、始元の能作としても、それは毫も時間性を導くことは出来ない。歴史は「時」を持たぬ論理のことではなく、實體の絶滅に於て成立するのではなく、實體もしくは實體間の發展を説かねばならぬ。この實在するものゝ生成可能の根本圖式に對する能力を缺くものとしての絶對否定は歴史の原理たることは出来ない。無限否定こそ時間をもつもの、發展をもつものの生成作用の原理として考へることが出來、相對的否定によつてこそ、吾等は個性と個性の相關を導く

ことが出来る。歴史の領域はあく迄も無限否定の作用する領域であり、發展的なる實體はすべて無限否定性を自らにもつ。相對的否定によつて個性は個性として限定され、すべての個性は個性を支持しつゝ、相關することが出来る。相對的否定と無限否定とはあらゆる歴史的に存立するものを可能にし限定する。しかしてかゝる具體的な否定は即ち個性限定であり、個性陶冶である。自らを強烈に否定すればする程、それは自己を絶滅することではなくして、自己を根源に近づけ、個性的に純化することである。私はこの意味にて自己自身の否定をもつ限り、それを歴史的實體と考へ、それを歴史的實體の根本的な特質と考へたい。個性的な實體が他との相關に於て、他に對して個性的異質の自己存立性を主張することは他を否定すると同時に自らをも否定せるものである。しかしそれは他の個性を無みし、自己を無に歸せしめ様とするものではなく、相對的に、そして無限に否定する發展的過程である。しかしてかゝる他との相關に於ける自己否定、無限限定を通しての陶冶に於て根本的に作らくものは個性化の原理である。歴史的實體の根本特質はこの個性化の原理を自らにもつにあり、具體的な無限否定とは實は個性化の原理の能作に外ならぬ。實體は他の個性實體との相關を通して自らを愈々個性的に實現する。實體はかゝる相關と限定を含んで常に深き綜合者であり、自己支持者である。生成に於て陶冶し、作用を通して常に根柢に止まる實體である。自己の生成に於ける連續の支持者、無限の相關の綜合に於ける中心である。歴史に於ては實體的なるもの

が、かくの如き辨證的相關を通して常に連續の基底として存してゐる。

單なる二元的對立として歴史の眞實は説き得るものではない。辨證神學に存する二元性は歴史の圖式を示すものとしては餘りに抽象的であり、形式的である。ゴッガルテンは『歴史は我と汝との遭遇によつてのみ形づくられる』とし、『現實は意識的に、もしくは無意識的に、道德的自由もしくは有機的生成のうちに形成されたる自我の一元的なるものではない。それは汝と我との永遠に二元的な、二重的なものである。そこに汝が存在し、その中に我が存在する現實であつて、我が先づ存在し、次に汝をその内容の一つとして自らのうちに把握する所の現實ではない。我が呼び入れられる現實であつて、我が我自らより呼び起す現實ではない。』^{註一}とする。これは歴史に於ける創造をすべて神に歸し、卑少化さるゝ我が歴史創造の中に個性的でありつゝ、汝と等しく實體的な自因の根源的性格をもつことを見失へるのみならず、汝としての神も歴史に於てあるものとしては個性的性格を去るものではなく、創造し行く歴史の過程にあつては我と汝は共に個性的相關に於てあり、我も個性的な實體性をもつものとしては單に汝の中に包攝せらるゝものではなくして、個性的實體の多元的相關が即ち汝であり、汝もここに一の歴史の實體性を得るのであることを明かにしない。歴史の中にあつては神も亦個性的であり、歴史に於ける相關は個性的なる實體の多元相關である。歴史の二元對立觀は歴史の具體的眞實よりは常に何等かの抽象を含んでゐる。

所謂我と汝との對立といふことに内在的な孤立反撥の原理とは、歴史的實體がもつ個性的特質に外ならぬと言ひ得る。辨證神學的二元觀に於ける、主の僕としての我に含まるゝ個性卑少の思惟傾向は、我を單に有限的實存とする思想とともに神學的思想の餘影であつて、個性の意味を最少限に見ようとする。しかし現代の吾等の歴史觀はあくまでも個性を基本とせねばならぬ。個性の自覺が學と社會の基本をなすことが特に現代意識の特色をなすと考へらるゝのみならず、これはまことの人性の自然であると思はれる。火を人間に奪ひ來つた天才ヘルメトイスは人間の誕生期に於ける、創造をもつ個性の苦惱と天才の受難を象徴する神話であらう。人間の自覺期に魁けたレオナルドが神に對する人間個性の矜持を、吾等は彼が描いた全裸の人間像に見ないであらうか。掩ふ所なき裸像を神殿に描いたことは、神に對する汚辱ではなくして人性を自然のまゝに表現したことであり、人間の自覺を神に示したことである。歴史の原理は人間的個性を基とし、これを中心とし、これを通してのみ求められる。ロエヰイトは「我」と「汝」との對立性を明瞭に説かんとして第三の「彼」なる概念をとり出した。我と汝とはこの「彼」によつて絶對に他なるものとして隔てられてゐるのであるが、この隔てられし相互は相對立し、相對峙し、それによつて却つて相互存立するものとし、これより社會の成立を説かんとした。絶對に「他」なるものも、これによつて「我」と「汝」たりうるのである。しかもこの「他」は、多の中の一 *alius* としてでなく、二者中の一 *alter* として、一は必ず第二の

secundus に對するものとしてののみ可能である。汝は我自らに對しての他者である。かゝる「彼」を媒介として一と他との相互依屬の集合によつて共存が成立し、共存に於ける相互の對等的獨立性はこの我と汝の根本的對立の相互依屬性によるのである。^{註一}ロエグイトは「彼」なる概念によつて絶對に異他なる我と汝をこの異他的獨立性をもちつゝ存立せしめ、我と汝の對立相互性を通して公共性をと^き、社會を説いた。もし我と汝の絶對對立の獨立性を個性と解すべきならば、彼に於ける「彼」は一の個性化の原理の意味をもつものと考へることが出来る。個人を絶對的他として隔絶せしめるとともにまた對立を通して相互性を説かるゝとき「彼」は單なる第三者ではなくして、寧ろ我と汝の基底にあつてこれを成立せしむるもの、寧ろ根源的なるものと考へねばならぬ。他を成立せしむるものたるのみならず、多の生産者である。しかし彼は「汝」をば *alter ego* として、隔絶性を強調して、その唯一性を説くこと少く、他と交替されうべきものと考へる限り、「彼」は尙ほ充全に「他」を個性化するものとは言ひ難いであらう。歴史に於ける辨證に於て否定せらるゝものは單に單一なる對立者ではない。限定せらるゝものは常に多なる個性であり、單に神に依屬するものではなくして、それ自ら實體性をもつ個性である。辨證神學は歴史を尙ほ神學的立場に見る點に於て、歴史の具體性に辨證の圖式を適用せんとするに於て、竟に歴史を歴史として明かにしうるに缺くるものがある。

歴史は慥かに我と汝との遭遇であり、對話であるとも言へよう。この歴史に於ける辨證に於ては

辨證神學に做つて汝を我よりも優位化するか、然らざれば我を汝と同格化するに於ては、ロエヴィトに於ける如く第三者の「彼」を考へ來らざるをえない。しかしてその「彼」も眞に媒介の任務を全たからしめんがためには、我と汝に單に同格たるものではなく、基底にあるものと考へねばならぬ。歴史に於ける辨證に於ては否定するものが、せらるゝものと同格のものたるを得ず、寧ろ基底よりの限定としてのみ正しく考へ得られた様に、媒介するものは單に同格のものたるを得ない。人事に於ても調停するものは二者よりも別殊の高き、もしくは新なる事態を生み出す深き基礎的立場に立たねばならぬ。一般に媒介といふ思想は尙ほ第三者的抽象を免れないが、最も具體的なる媒介は限定的母胎の能作である。かゝる具體的なる辨證にあつては否定するものと媒介するものとは同一である。否定するものは多様の個性を限定し、個性相互の相關を可能ならしむるものも又この基底でなければならぬ。歴史に於ける辨證は一言にして個性的限定とその對立と相關につきる。

註1 Gogarten: Ich glaube an den dreieiligen Gott. S. 35 f. 68 f.

註2 Löwith K.: Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen, Ein Beitrag zur anthropologischen Grundlegung der ethischen Problem. 1928. S. 55 f.

六

近代の辨證論はカントの二元論的世界觀に基づく二律背反的考へ方を基調にもつものが多い。フィヒテはカントのこの二元論的思想にあき足らずして、これを根源より動的に解釋せんとし、そこに

實踐的なる基調の上に自らの哲學を打て建てたが、しかし、そこには尙ほ銳利に強調せられたる二律背反的思惟の仕方の内容を含めることを掩ふことが出来ない。ヘーゲルはこの辨證を實踐的より舉揚して精神的必然性に歸したが、そこには一の止觀的立場とそして圖式化とを免れなかつた。フイヒテの實踐的行的の辨證は元來極めて具體性を帯びたるものであり、殊に後年の辨證思想は歴史哲學的なるものと結合して無限の個性をそのまゝ肯定する深き直觀の辨證をもつてゐた。然るにヘーゲルの精神の辨證は次第に論理化を進めて歴史をも論理化し、精神の圖式を實在に當てはめ様とした嫌ひなしとしない。殊にその思惟圖式を端的に繼承するものにあつては、その否定は論理的なる思惟の否定と等しく、否定せらるゝものはその實質の異別と個性にかゝはらず、一樣に否定の對象とせらるゝ事が多い。然るに歴史を内容とする世界概念は單に二律的な相反とその綜合の直線的な過程ではなく、寧ろ常に多元的な個性を許す一の空間的なるものの内部に於ける相關と發展である。單なる辨證の對立的否定だけでは個性の無限とその同時的相關は説きえない。個性の相關は一が一に對する敵對關係ではなく、一が凡てに對し、もしくはは凡てが凡てに對する自己の個性の支持によつて成立する。自己の個性を支持すること愈々強くして、その相關は愈々廣く無限的となる。これが單なる辨證の止揚關係を以て説明すべからざることは、辨證的なる相反關係はそれ／＼に自己矛盾の相容れざる關係なるが故に、その抗爭の後の止揚に於てはそれ／＼は自らを殺したる

もの、少くも自己性を質的に變へたる他者とならねばならぬ。もし然らざれば二者がそのまゝに存立する止揚といふことは許されない。然るに歴史的個性は否定さるゝとも決して個性を失ふことなく、自らの支持は自らの純化に外ならぬ。實體は斷滅しない。宗教的轉心の如きも決して個性を消滅し他に没入するといふことはない。單なる否定をもつ辨證のみにては個性によつてなる ゲマインシャフト 社會といふことの説明は不可能である。辨證にては文化的個性の説明に決して充全であるとは言へない。辨證も方法として固定化すれば、辨證そのことの辨證、従つてそれ自らの止揚を餘義なくされることは當然であると言はねばならぬ。

ヘーゲルの精神現象論を見れば、彼が如何に史的關心に強かりしかを知り得ることラッソンが吾等に指示する通りである。^{註一}ヘーゲルにては時間は單に自然認識に關するものではなく、精神が自ら與へし制約、精神がその表現すべき範圍に對し形式として頰ち與へし制約である。しかし彼は一般に歴史を彼固有の「精神」より眺めた。彼は精神的時間を見出しつゝも、必ずしも歴史的時間を完全に演繹してゐたとは言ひ得ない。歴史に於けるすべての事實的推移と發展を辨證的進展の形式をもつて説かんとすることは、史家ランケの主張する如く、事實上不可能のことである。そこにては理念が自立的存在であつて史的人間はすべて豫定の對線を辿る傀儡であり、却つて自らの精神なき骸骨たるにすぎなくなる。しかし歴史を作るものは個々に個性と自主性をもつ個性的な實體とその

相關である。歴史に於ける辨證的止揚といふことも、必ずしも絶ち切られたる新たなものの發生ではない。必ずや母胎の連續の上に創造の附加されたものであり、その自ら結ぶ個性が一見他よりの隔絶を思はしめるのみである。革命も歴史の因果を絶たれたるものではなくして、必ず生れ出でねばならぬ理由をその母胎はもつてゐた。連續を絶ちきられたる、異質の他への飛躍ではない。全たく新たなものの生成は、多くは認識するものゝ觀點の轉換によつて生ずること多く、絶たれたる連續に於て歴史といふものは考へることが出来ない。只單なる連續的發展論と辨證的革新論の誤りは、歴史の連續が個性の生産的連續であることを熟知しない點にある。

しかしヘーゲルの「否定」はその眞意味について見れば、彼自らが「否定的なるものゝ眞摯さ、苦惱、忍耐と勞作」とすらいへる様に、決して形式的な外面的なものではなかつた。ことに彼の「精神」の概念は、その最初の起原について見れば、最も具體的なものであつた。彼の最初の根本概念は「生」であつたことは、ディルタイやノールがヘーゲルの壯時の手記についての觀察によつて吾等に明示する所である。しかもこはすべての行爲の綜合主體としての道德的存在たる生と考へられ、これが一層反省的、辨證的性格をもつに至つて「精神」なる言表をとるに至つた。多様なものの生ける統一、無限なる生を抽象的なる死せる多數に對立させて精神と名づけられたのである。かくてヘーゲルの辨證は、本來その對象と内容より毫も區別されたものではなく、内容そのものであり、内

註二

容を動かすものは内容それ自身もつ方法である。只至高の實在としての精神に基礎的な重點がおかるゝとき、辨證は精神の方法として生に必然の圖式として對立した。

個性の特質は唯一性にあり、唯一性は他に對する事によつてのみ可能であり、他より峻別せらるゝことによつて發揮せられる。従つて個性はそれ自身として見れば相互に相反する對立をもつてゐる。一の個性は決して他の個性となる事は出来ない點よりのみ言へば絶對の存立をもつと言ふことも出来る。併し個性は他面に於て必ず相關と連續に於て一の體系の中にのみ自らの個性を支持しうるものである。もしこの連續的體系を作る基礎的なものゝ作きを、一般的なるものと言ふならば、個性は本來一般的なるものを持つものとしてのみ存しうる。個性的と一般的とは概念として相矛盾するものであるならば、個性はそれ自身既に相矛盾するものゝ合一を自らの存立に於て含んでゐると言はねばならぬ。かゝる矛盾の合一を辨證的と言ふならば、個性は連續的であつて且つ辨證的である。個性がもつ連續とは即ち辨證的性質を含んでゐる。只個性は決して相互に絶對的に相矛盾するものではなくして、それゝに個性をもつものとして相反の關係に於てある。それは相關的辨證もしくは歴史的相關に於てあると言ひ得る。歴史に於ける辨證は只流動するものゝ辨證ではない。常に全たく他になりつゝあるものゝ辨證ではない。辨證を作る個性は自らの實體性を失はずして辨證する。究極に自己同一といふ事なくして作用といふこともなく、推理といふこともなく、發

展もなく、相關もない。歴史に於ける辨證は自己同一の連續をもち、無限の個性の辨證をもつもの、連續である。辨證といふことは相關の一樣相であり、辨證は深き連續の中に於て可能である。

註一 Lasson: Hegel als Geschichtsphilosoph, S. 85 f.

註二 Dilthey: Jugendschriften Hegels, S. 140 f.

Nohl: Hegels theologische Jugendschriften, S. 266.

七

以上歴史に於てある辨證について考察し、私は辨證に於ける特質的なるものとして、矛盾、否定、媒介のそれ々について、それが歴史的領域に於てもつべき意味を検した。それによれば矛盾とは歴史的實體自らに於ける自己矛盾に於ても、それは決して自らを絶滅の完なき無にまで導く矛盾ではなく、自己自らの固定的實有性を生動と生成に導く矛盾である。歴史的實體に於ける矛盾とはこの意味にて歴史的時間を産む根源である。また對他の間に見出さるゝ矛盾も、たとひ盡くることなく見出さるゝ矛盾であつても、それは相關を可能ならしむる矛盾であり、むしろ同一のものにあらざることによつて相互を相關と進展に支持する矛盾である。また否定とはおのづから、絶對の否定ではなくして無限の否定である。歴史に於ては絶對に對者を絶滅せしめるとき、自らも滅亡しなければならぬ。かゝる無限の否定は従つて常に相關に於ける否定であるが、相關に於て否定し兩者を

その本質的なる個性に於て支持する否定は、即ち個性を構成し、純化し、陶冶する作用である。しかしてそこにては否定するもの自らが、否定せらるゝものよりも基底的なる次元にあるものでなければならぬ。否定者は言はゞ兩者をともに成立せしめ、これを哺育母胎である。歴史に於ける否定は即ち個性限定である。それは一が一の對立者に對する否定たるよりも、寧ろその根本に於ては、一が他に對する自己支持である。歴史に於ける否定とは却つて個性の限定とその成立發展を意味するのである。そして歴史に於ける一般的なる否定とはその母胎への反省であり、根源の自覺を意味する。歴史に於ける否定は他面に常に大いなる、もしくは唯一的なる肯定的なるものを見出すのである。また歴史に於ける辨證の媒介とは、同格的に對立するものゝ單なる第三者ではなく、寧ろ對立する兩者の基底的なるもの、母胎的なるもの、より根源的なる實體である。それは固定の有ではなく、單に受働の能作をもつ無でもなく、规定的な根源的法則である。實現さるべき理念をもちつゝ常に個性的なるものに結合し、無限の限定を續け行くものを意志といふならば、歴史に於ける媒介の基底に能作するものゝ原理を私は意志的なるものに認めるの外ない。その精説は他の機會に讓るべきではあるが、私は歴史のなるものの特質を時間的、個性的、意志的の三者にあると思ふ。そして辨證にして、時間を導き、個性を限定し、意志的内容をもつものをこそ歴史の辨證法といふことが出来ると思ふ。單なる論理の辨證、絶對否定の辨證は時間と個性と意志とを導きえず、又もち

得ざるものである。普通に所謂辨證といふことはその中に必ずしも歴史を含まず、まして歴史を導くものではない。しかして眞に歴史を説明しうる歴史の辨證の根本特質をば、上記の三つの特質を含む根本特質としての「生産」といふことに求めたい。歴史とは産むものである。産むといふ所に歴史の原始形態がある。

ヘーゲルの辨證的方法が時間の問題を特にその自然哲學の問題として取扱ひ、精神哲學に於てこれを更に深刻なる主題として取出すことのなかつたことは、彼の辨證法が正當には精神哲學従つて自ら歴史的時間の眞性質を根本的に明かにするに適はしきものでないことを示してゐるのではないであらうか。歴史的時間は決してカント的な感性の圖式をもつて明かにすることは出來ず、またヘーゲル的な自然哲學的法式をもつて明かにすることは出來ないであらう。寧ろ歴史的時間の解明はデイルタイが時間を生の根本範疇とした考想に汲み取り得べき豊かなるものを藏して居り、ハイデッガーが存在の意味としての時間を中核として實存の哲學に進め行いたことに當然の發展を認め得ると思ふ。しかしこれ等有限の哲學が歴史的時間と歴史的认识に究極の基礎を與ふべく客觀的基礎に稀薄なるを思はしめる。ヘーゲルにも固より生産の概念は存するのであつて、人はこれをもつてコーヘンの産出の思想との類縁を依繋せしめようともするが、しかし、コーヘンの産出の思想は明かにライブニッツの實體生産の思想に享くるものであらう。コーヘンの鋭利と繊緻に拘らず、一般に

その理性主義的思惟は、ライブニッツのそれとともに、尙未だ歴史の眞と歴史的時間については解明を與ふる所は割合に少なかつたと思はれる。

時間の不可逆性はまことは歴史的時間に言ひ得べきことであつて、連続性に於ける個性が個性を産むといふ生産關係の唯一性に基づくものである。すべて繰返しうるものは何等か普遍的なるものであり、個性的なるものは常に唯一的なる關係をもつ。唯一的なるものが唯一的なるものを産み、個性が個性を産む生産關係こそ眞に繰返すべからざるものである。時間が個性的生産的なるものをもたぬ限り、時間の純内在過程は、異質をもたぬ只永遠の過程と言ふべきものであつて、それは可逆的に思惟することも、もしくは寧ろ同時的なるものとも考へうべきものである。時間はヘーゲルに於ける様に否定の原理でなくして、生産の原理である。歴史の實體が只そのまゝなる持續をもちえずして自らに異質の連續をもつといふことが生産的なる所以であり、異質の生産をなす圖式が即ち歴史的時間である。この意味にて歴史の實體はその本性上、時間的であり、時間はその根本制約である。自らの固定的持續を本性上保ちえぬといふ點にては自己否定をもつものであるが、その否定は自らを無みする否定ではなく、自らを生産に齎らす否定であり、こゝに時間が見られるのであるが、かゝる限定の形式としての時間は寧ろ個性肯定の原理である。一が異を産むといふ所に時間の根本形式があり、この異を個性として再認する所に叡知的空間としての世界の原始形式があり、

かゝる個性の生産的發展に歴史の根源形式がある。

歴史的實體は刻々に自らを生産するを特質とし、そこに自らの生命と存在を示す。その生産と陶冶の作用に於ける形式は即ち時間であつて、その點にては時間は尙ほ形式的規定であると言ひうる。その生産内容を個性として陶冶する限定は、實體そのものをもつ根源の能作である。時間は生産の作用規定であり、生産さるゝ内實は根源より個性として規定せられる。しかして自らの生産内容が他に影響し、もしくは子孫に傳統するにあつても常にこの個性的な根源制約に於て新たなものを産出するのである。常に個性的に異別のを産み乍ら、この異別に於て根源的に一なるものをもつて連續する所に生産の眞意義がある。從來の辨證的思想にあつても個別的なるものゝ全體に於ける位置シユテレといふことは考へられてゐた。しかし位置の規定は必ずしも個性の限定ではない。最も具體的なる位置の規定は産むもののみが決定する。しかも又單なる辨證法が個性の辨證法でなき所より、一が轉成して他となるとする所に辨證の考へ方は向けられてゐた。しかし歴史的個性そのものに於ては發展はあるが他に轉生するといふことはあり得ない。他の個性を産むといふ所から、一の根源的規定を不動に制約してゐる。まして同一の實體にあつては他の個性に輪廻して自らを失ふことはない。感激と決斷に富んでゐた南洲が月照と相約して入水氣絶し、「再生」した後と雖も、南洲は南洲の個性を保存してゐた。歴史的實體は他の個性を生産するものであり、しかも自ら

の個性に於て自らを保たざるを得ぬものである。そしてこの生産性といふことに、歴史的實體のまことの自主性と歴史的先天の制約性とが見られるのである。個性がうちに分離性とそして統一性をもつといふことも、この生産性によるのである。歴史的現象に於て種々なる分散性が認められるといふことも、本来歴史がもつ個性が分立性をもつといふことであり、それは全た分離性にあるのではなく、大いなる生産性に於て歸一せらるゝものである。

かゝる生産の作用は實體の意志、格的性格による。悟性は普遍的なるものに結合し、意志は具體的なものに結合する。そして意志の究極の作用は個性生産に極まる。本源となる意志は働らかんがために対象を、具體的な個性を作る。先きに言へる個性化を含む理體、グノスの性格をもつ「類」、これは即ち根源的な意志に外ならぬ。固よりこゝにいふ意志は個人的な主觀的な心理作用としての意志ではない。根源的意志をもつ意識は單なる主觀ではない。主客を含んだ根源、個人的意識を生む本源である。意志は理念と行爲を通して、個性的なるものを生産する。あく迄も自主と自由を離るゝことがない。それは單なる表現ではなくして實現である。自らなる表現ではなく、行爲を通してなされ、行爲を通してなされるが故に眞に個性の生産たることを得る。最も具體的な歴史的生産のことは意志と行爲を通しての實現であり、單なる表現のことは只文藝と有機體を觀照するに適はしい。すべて自然的ならぬ、機械的ならぬ深刻なる緊張は意志的なものである。ベルグソンに

ても融合的繼續を可能ならしむる刹那は内面的衝動力 *puissance intérieure* をもつものであつた。しかし後年の著作に高調せられた相互滲透は、對立する二者の豫想が強きに過ぎる傾がある。二者の相互滲透よりは何物も生れはしない。滲透の眞意義は寧ろそこに何物かを孕む所にある。全く相矛盾する二つのものゝ與へられてその統一に一の特質を示すと考ふべきよりも、寧ろ、この二者の産出そのことに見らるゝ根源的能力を基として考ふべきである。そして生産といふことは、生産するもの自らより異なるものを産出することであり、連續とは個性と個性との連續であると同時に、個性と根源との連續である。絶對に相反するものは合一することは不可能であり、合一さるべきものは相異りつゝ自らを支持する個性であり、これの合一を可能ならしむるものは連續であり、この二者の連繫によつて他の何物かになるといふことは寧ろ二者を含む根源的母胎よりの新たなものゝ生産と考ふべきである。そしてそれは根源的意志の個性生産作用に基づくものと言はねばならぬ。

但し私はここに生産の概念を、ひとり生理的關係にのみ限らうとはしない。狩野派の歴史に於て永徳は、よしそれが養子であつても山樂を生んだのであり、この藝術の發展的傳統に於て、血統關係をもつ秀信が常信を生んだことにも増して、より多く「生産」の概念に値すると思ふ。そして又よし時代は距つたにしろ、光琳の藝術は抱一の藝風を生んだと言ひ得る。私は一般に個性か個性を産み、産まれし個性は一の傳統を母胎とし、新たな創造を含みつゝ、しかも一にして異の關係を

もつ所に生産もしくは産出の概念を適用したい。即ち個性が異質を合みつゝ連続し、異にして一の関係をもつ所、そこに生産関係を認める。かく生産を最も廣義に解するとき、歴史は、その最も即近するものは親が子を産む事實に於て、一般には個性的實體が自らの能作、及び他の個性的實體に對する関係、影響に於て、根本的には生産関係であると思ふ。歴史は總體として生まれしものであり、また生みつゝ行く個性的實體の連続である。歴史的時間とはこの根源的な生産の圖式に外ならぬ。(未完)